國學院大學学術情報リポジトリ

学芸員養成課程のグローバル化における課題と展望：上海大学博物館学研修を事例として：國學院大學博物館学講座開設60周年記念特集：博物館・博物館学の諸問題 2

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 落合, 知子, Ochiai, Tomoko
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000318

学芸員養成課程のグローバル化における課題と展望

―上海大学博物館学研修を事例として―

落合知子

はじめに

長崎国際大学は、地方の小規模大学ではあるが、少子化の影響を受けることなく定員数を保ち、とても活気のある大学である。現在、長崎国際大学における学芸員養成課程の課題は、博物館学のグローバル化である。国際大学であることから留学生の受け入れ態勢は整っており、留学生たちに開かれた学芸員養成課程を推進することが本学の責務と言える。

平成二十七年度学長裁量経費に「留学生に対する博物館学の啓発と博物館学教育の質的向上の実践」が採択され、学芸員養成課程の充実を図った。そして、平成二十八年二月に上海大学博物館と長崎国際大学人間社会学部との協定調印が実現し、同年七月には三週間に亘り、上海大学博物館学研修生を受け入れて、本学の博物館学履修生たちとの国際交流を実践した。上海大学側からの博物館学研修に対する反響は予想以上に大きく、今後の上海大学博物館学研修生の受け入れの継続が決定され、平成二十八年度はより多くの研修生の受け入れとカリキュラムの充実を図ることができた。

このような博物館学に特化した研修で海外からの受け入れを

実践している大学は未だ無く、国際大学である本学の使命とも言えるものであり、九州域で特色ある博物館学の実践が求められている。特に中国は学芸員制度が確立されておらず、本学で学芸員資格を取得した留学生たちには、帰国後も母国で博物館関連の仕事に従事できるようなシステムを構築しなければならない。また、本学には中国民営博物館館長の子弟も在籍し、日本の学芸員資格の取得を目指している。少しずつ浸透してきた中国における博物館学の発展に寄与する人材育成が現在の大きな課題である。

本稿は本学の学芸員養成課程の現状と課題を取り上げ、今後のグローバル化に向けた学芸員養成の一助とするものである。

一、我が国の留学生政策

昭和五十八年に「留学生受け入れ10万人計画」が策定されて以来、途上国の人材育成への貢献及び国際友好関係の強化を主な目的として、留学生の受け入れ拡大が実施されてきた。平成十五年にその目標は達成され、平成二十年には「留学生30万人計画」が策定されて、現在、留学生数は14万人前後で推移している。

グローバル化が進む中でグローバル人材の育成が求められる一方で、世界規模で優秀な外国人留学生の獲得が激化している。平成二十五年に閣議決定された「日本再興戦略」および「第2期教育振興基本計画」には、平成三十二年（二〇二〇）に「留学生30万人計画」の実現を目指すとともに、戦略的な外国人留学生の確保を推進することが明記されている。

平成二十五年十二月に戦略的な留学生交流の推進に関する検討会から提出された「世界の成長を取り込むための外国人留学生の受入れ戦略（報告書）[1]」には、留学生の受入れは我が国の学術・文化を世界に広めることといった、教育・研究面において重要な役割を果たしている。我が国で学んだ帰国留学生が人的ネットワークを形成し、相互の学術・文化に関する友好関係の強化と発展の架け橋になると明記されている。さらに二〇二〇年に開催される東京オリンピック・パラリンピックを契機に、我が国のスポーツや文化等を積極的に海外へ発信するうえで留学生の果たす役割は重要であると予想されているのである。

中国を事例に挙げると、中国では二〇二〇年までに50万人の外国人留学生の受け入れを目標とし、世界各地に690余りの孔子学院・課堂を設立して中国語の普及活動を行っている。また、

韓国でも同じく二〇二〇年までに20万人の留学生の受け入れを設定している。このようにアジアを中心として世界的な人材獲得競争が激化しており、優秀な研究者や技術者だけではなく、留学生もその対象となっていることが理解できるのである。

前述した「日本再興戦略」では、我が国の発展に寄与すると考えられる地域との関係を構築する分野を設定し、機動的・戦略的な留学生の受け入れを実施することが掲げられた。これを受けて文部科学省は、留学生への支援のみならず「スーパーグローバル大学事業」や「大学の世界展開力強化事業」等による大学の国際化を推進してきたのである。

以上のように、日本政府は質の高い教育・研究交流の促進を実践してきたが、優秀な留学生数の増加の為には、魅力ある環境整備と質の高い教育・研究を享受し、帰国後にキャリアパスに繋げることが求められるのである。このような政府の政策を踏まえて、留学生の受け入れと我が国の質の高い教育を掲げている長崎国際大学における留学生及び海外研修生に対する取り組みについて論じていくこととする。

二、長崎国際大学の学芸員養成の現状と取組み

平成二十八年二月二十六日、長崎国際大学人間社会学部と上海大学博物館との協定が締結され、第1回上海大学博物館学研修が、同年七月十八日から八月六日の間で実施された。第1回目の研修が今後両校の交流を発展させていく上で、重要な研修であることは言うまでもなく、本研修を恒常化させることが最大の目標であった。翌年の平成二十九年七月十七日から八月四日にかけて、第2回上海大学博物館学研修が実践された。1回目と比較すると参加した学生数は増加しており、第1回目が成功したことの結果でもある。そして、九月四日から八日までの五日間に亘り、本学学生14名が語学研修生として上海大学で学ぶことができた。教育レベルの高い上海大学での研修が実現し、本学学生に対する教育の質的向上に繋げることができたのである。

今回の協定締結において上海大学から高く評価された点は、博物館学に特化した研修内容の充実である。日本に於いてこのような博物館学に特化した研修を海外から受け入れている大学は皆無であり、国際大学である本学の責務とも言える。一般的

に日本の大学は、海外の大学と協定を結ぶものの協定校に学生を送り出すことに始終し、協定校からの受け入れを積極的に実践することは少ないのが現状である。このような点からも九州域における国際色豊かな博物館学の確立を目指す第一歩となるものと確信している。

また、本研修は上海大学の学生だけを対象とした取り組みではなく、本学で博物館学を学ぶ学生の積極的な参加を特徴としている。上海大学の学生との交流は、学芸員を目指す学生にとっては貴重な機会であり、また留学生に対しては博物館学課程へのいざないとなるはずであり、有意義な体験であることは明白である。このように本研修は両大学の学生にとって、貴重な体験となることが期待できるのである。

三、上海大学博物館との協定調印の経緯

上海大学は一九五八年に創設された中国〝211工程〟市立重点大学で、二〇一五年QS中国大学ランキング全国15位にランキングされている。また、上海大学博物館は日本の博物館学及び大学博物館を参考に設計された大学博物館で、二〇一七年十二月に完成する予定である。

平成二十八年二月二十六日、上海大学楽乎新楼大学庁において「長崎国際大学人間社会学部と上海大学博物館の学術、教育交流に関する基本協定」締結の調印式が執り行われた。平成二十八年五月九日、本学においても「長崎国際大学人間社会学部と上海大学博物館の学術、教育交流に関する基本協定」締結の調印式が執り行われた。

上海大学との関係は、上海大学において、「野外博物館」をテーマとして博物館学の講演を行った二〇一二年に遡る。その後、毎年上海大学に出校し、特別研究員として上海大学付属博物館の建設や展示指導に参加してきたこと、二〇一三年に文化庁の研究助成金に採択され、上海大学博物館長助理を日本に招聘するなど、地道に信頼関係を築いてきことが大きな要因であるが、今回の協定調印が実現したのは、本学の教職員の理解と協力の賜であることは言うまでもない。特に教育活動を推進するには職員の協力なしでは成し得ないことであり、その点に於いては、本学のサポート体制は整っていると言える。

四、学長裁量経費採択による効果

平成二十七年度学長裁量経費に「留学生に対する博物館学の

啓発と博物館学教育の質的向上の実践」、平成二十八年度学長裁量経費に「博物館学課程のグローバル化に向けた上海大学博物館学研修の実践」が採択された。平成二十七年度では、留学生に開かれた博物館学芸員資格課程の変革と、実習機材の充実を図るべく、教育的資質の向上を目指して教育環境の整備を行った。当該年度の学芸員資格取得見込み者は14名と非常に少ない状況であり、一定数の履修者確保が課題であった。二十八年度の資格取得者は27名、二十九年度は40名余りの資格取得者を輩出する予定である。平成二十七年度と比較するとその数は3倍になることが予測され、少しずつではあるが、学芸員養成課程の安定化が図れたことは明白である。

平成二十七年度は実習機材の充実が大きな課題であり、当初の実習室は物置になっており、授業が成り立たないのが現状であった。我が国の博物館の約8割が歴史系博物館であることから、学芸員は歴史資料の取り扱い方の修得は基本的要件であり、博物館は「モノ」で教育する社会教育機関であり、博物館実習も「モノ」がなければ実習をすることは不可能である。したがって、取り扱い資料がなければ、実習そのものが通常の講義形態の授業と変わりないものとなろう。また、実習機材も皆無に等しかったことから、毛氈から始まり、掛け軸、巻子本、刀剣、手入れ道具、装潢用具、仮張り用板、裏打ち紙、カメラに至るまでの実習機材の充実を図った。それにより、従来博物館学実習で指導しなければならない内容を実践することが可能となったのである。

特別講義には、上海大学中國藝術産業研究院羅宏才教授、西安市于右任故居紀念館于大方館長、國學院大學青木豊教授を招聘し、本学学生と留学生に対する講義を開催した。聴講した教員からも高い評価を受け、学生の博物館学意識の向上が図れたと確信している。その他、勾玉づくりのワークショップの開催、博物館学芸員課程リーフレットの作成など、ほぼ100％に近い達成率を果たすことができた。

平成二十八年度は、不足している実習機材の充実を図るため、甲冑、刀剣、拓本用の一次資料である銅鏡・華鬘・古瓦等を購入して、ほぼ実習機材の整備は完了した。更なる目標は、日本語版と中国語版の博物館学実習用教本の開発であった。特に中国語版実習教本の開発は、上海大学博物館学研修生の受け入れを継続するには必須であり、本学の留学生に対しても有効なテキストとなるものである。特に歴史資料（掛け軸・巻子本・刀剣・甲冑等）の取り扱いや、紙資料の修理・修復技術（装潢技術）を指導する実習においては、特殊な専門用語が多く日本語

が堪能な中国人留学生に対しても中国語版の教材は有効なことは明らかである。学内実習及び、上海大学博物館学研修にも実習教本が活用されて、更なる博物館学の質的向上が図ることができ、環境が整ったと言える。研修生からも教本に対する評価は高いものであった。当然ながら、日本人の学生にとっても実習教本は必要不可欠であることは言うまでもなく、効率よく実習を行うことが可能となった。

五、上海大学博物館学研修の実践

第1回上海大学博物館学の研修生は16名、内訳は男子5名、女子11名（大学1年生2名、2年生4名、3年生9名、4年生2名）で、研修生たちにアンケート調査を行った結果、「予想をはるかに超えた満足度であった」と高い評価を得ている。本研修の講師を担当した教員が実感したことは、上海大学の研修生は学力レベルが高く理解が早いこと、積極的で行動力に富んでいる点であるが、我々教員側も本来の大学教育の基本的なあり方を再確認することができ、本学の学生指導に繋げることができた。

また、上海大学側からの強い要望は、今回の研修に実習を多く取り入れた内容とすることであった為、茶道をはじめとして、波佐見町での焼き物体験、国立公園九十九島、国立公園雲仙での現地調査、博物館資料の取り扱い（掛け軸・刀剣・甲冑）、紙資料の修復技術、後半に博物館見学実習を組み込み、理論と実践の両立を図った。5限目以降は日本語の特別指導も加わり、研修内容は充実したのもとなった。事前調整では、博物館での実務体験の要望を受けていたが、その点は実現することが出来なかった。その理由は、本学の学芸員資格取得に必須である学外実習の受け入れにおいても、学生の受け入れ先を探すことが難しいのが現状であり、海外からの博物館学知識を有さない短期研修生を受け入れる博物館を探すことは不可能であった。アンケートにも博物館での体験を希望する意見が見られたが、今後の難しい課題と言える。

第2回目の研修生は21名、その内訳は男子7名、女子14名（大学1年生4名、2年生8名、3年生8名、大学院生1名）であった。今回の研修で改善したことは、講義および実習内容を専門的かつ高度にすることである。第1回目では広く浅く概論的な講義構成としていたが、研修生の要望が高度な内容を求める声が多かったため、各教員の専門分野に特化した教育の実践が可能となった。昨年度のアンケートで評価が低かった科目は除き、

実習の充実を図った。その結果、博物館実習（刀剣・甲冑・装潢技術）及び茶道体験がアンケート調査による評価が高く、観光学関連の講義と野外調査の評価が低い結果となった。野外調査は猛暑も相俟って、体力的に厳しい状況であったことが原因であることは明白である。アンケート調査を分析した結果、上海大学の学生の要望は博物館学と日本文化を学ぶことであり、来年度の研修は幅広い分野を取り入れるのではなく、博物館学に特化した研修計画を立てることが求められる結果となった。

ハウステンボス美術館見学実習風景

㈠　研修で作成した教材

第1回目で使用した博物館実習教本は研修用の仮テキストであったため、製本に向けて編集を進めた。この実習教本の作成事業は学長裁量経費の一環であることから、大学院生の参加を目的の一つとした。大学院教育に必要なことは、積極的に院生を調査に参加させ、調査方法を身に付けることから始まり、報告書などの刊行物にも関わらせることである。それは就職活動に於いても、調査歴や執筆歴として履歴書を埋めることができ、研究助成による調査であればなおのこと、その価値が高くなることは言うまでもない。

実習教本は日本語版と中国語版を作成し、上海大学研修のみならず、中国から本学に留学している在学生に対しても使用が可能となった。歴史資料の取扱いは難しい言葉で説明することが多く、これまでもその指導には限界を感じていたが、中国語版の実習教本の開発により、質の高い実習を実践することが可能となった。中国語版の翻訳は国際交流・留学支援室のスタッフの協力を得て作成することがで

実習教本

第2回上海大学博物館学研修計画表

7月17日（月）	上海 ↓ 長崎　宿舎案内・夕食会				
	9：00〜10：30	10：40〜12：10	13：00〜14：30	14：40〜16：10	16：20〜
7月18日（火）	開講式・ガイダンス	日本語	博物館実習（四方掛等）	博物館実習（掛軸・巻子本）	歓迎会
7月19日（水）	波佐見町　陶磁器講義	波佐見町　陶磁器講義	波佐見町焼き物体験	波佐見町焼き物体験	日本語
7月20日（木）	古代オリエント文明①	古代オリエント文明②	地域デザイン論	デザイン実習	日本語
7月21日（金）	日本文化論①	日本文化論②	博物館実習（刀剣講義）	博物館実習（刀剣手入れ・甲冑ＰＰＴ）	
	昼食	昼食	昼食		
7月22日（土）	ハウステンボス美術館見学				
7月23日（日）	佐世保クルージング（無人島上陸ツアー）				
7月24日（月）	博物館情報メディア論	日本語	国立博物館論	着物の文化	日本語
7月25日（火）	日本語	博物館実習（甲冑装着）	茶道着付け体験	茶道体験	日本語
	昼食				
7月26日（水）	軍艦島ツアー		長崎歴史文化博物館・長崎県美術館・稲佐山夜景見学		
7月27日（木）	観光文化論	国際観光学	博物館実習（拓墨・拓本）	博物館実習（正麩糊・装潢）	日本語
	昼食				
7月28日（金）	博物館概論	博物館展示論	博物館実習（装潢）	博物館実習（装潢）	ＢＢＱ
	昼食				
7月29日（土）	休日（希望者のみバイオパーク）				
7月30日（日）	国立公園雲仙の火山と温泉を学ぶ（道の駅みずなし本陣内被災家屋・旧大野木場小学校被災校舎）				
7月31日（月）	島原の歴史と火山災害を学ぶ（雲仙岳災害記念館・島原城内博物館・城下町見学）				
8月1日（火）	波佐見町文化財調査・焼き物受け取り	登り窯体験・佐賀県立九州陶磁文化館見学			
	昼食				
8月2日（水）	修了式・佐賀県立宇宙科学館・佐賀県立佐賀城本丸歴史館・吉野ヶ里遺跡見学				
8月3日（木）	九州国立博物館・太宰府天満宮宝物館・午後自由行動				
8月4日（金）	福岡 ↓ 上海				

きた。平成二十九年度第2回目の上海大学博物館学研修に使用した結果、教本内容に対する高い評価を得ることができた。

㈡　学外実習の成果

学内実習のみならず学外実習も充実した内容で実践しており、特に国立公園雲仙の現地実習は、研修生にとっても貴重な体験であった。初めて体験する硫黄の匂いや湧き出る温泉を見て、さらに足湯の体験も驚きと発見の連続であり、このような充実した現地実習を実践したことが、第1回目の研修に大きな成果を齎したと言える。博物館実習でも注意しなければならない点は、歴史資料の取り扱い方だけを指導するのではなく、歴史的背景・資料の材質・構造などをよく理解することが大前提であるが、学外実習も同様と考えている。今回の学外実習は講義を組み合わせた現地実習であったことが研修生からも高く評価された点であった。

第2回目の雲仙実習は1泊2日とし、ナイトツアー、島原の調査を加え、より充実した内容の研修を実践することができた。また、世界遺産に登録された軍艦島ツアー、佐世保クルージング（無人島上陸ツアー）など長崎の特徴あるフィールド調査を推進することができた。

以上のフィールド調査と並行して、第一義である博物館調査も時間の許す限り行程に組み込み、日本の博物館事情を伝えることができた。九州国立博物館を始めとし、長崎歴史文化博物館、長崎県美術館、佐賀県立宇宙科学館、佐賀県立佐賀城本丸歴史館、吉野ヶ里歴史公園、太宰府天満宮宝物館等を見学地として設定しているが、研修生の要望から自然史系の博物館調査の数を増加させていく予定である。九州域の博物館は特徴ある博物館が少なく、見学地の選定は今後の課題と言える。

六、中国における博物館学の位置付け

研修に参加した学生は、我が国の博物館学のレベルの高さを評価しているが、中国における博物館学はどのような位置付けにあるのか以下に考察を試みる。

中国において博物館学を開講している大学とそのランキングは1．北京大学、2．中国社科院、3．中央民族大学、4．北京師範大学、5．中国人民大学、6．吉林大学、7．四川大学、8．中山大学、9．浙江大学、10．山東大学となっており、1～5まではすべて北京に所在する大学である。ランキング1の北京大学の考古文博学院は、中国の考古学と共に成長してきた

北京大学国学門研究所の学生
（北京大学考古文博学院HPより転載）

歴史を有している。近現代考古学は中国の歴史的背景と国家民族に深く関わってきたもので、二十世紀の初頭に、中国における国家・民族・歴史といった三つの危機状況のもとで出現した学問領域である。

十九世紀末から二十世紀初めにかけて、欧米の探検家や学者による活動が活発になり、日本の探検家や学者も頻繁に中国の考古学遺跡を発掘してきたことは周知の通りである。この一連の活動は長年に亘り行われ、中国人の民族感情を高めることとなり、二十世紀の初めには、中国国内で殷墟甲骨文・敦煌蔵経洞・明清時代古文書などの大きな発見も相俟って、中国国内における近代考古学の研究が盛んとなっていった。

このような時代背景のもとで、考古学は中国学術界に注目されることになり、中国の大学・高等専門学校に考古学専攻が誕生していくこととなった。最初の大学考古教学研究室は、のちの北京大学考古学研究室の前進である北京大学国学考古学研究室と清華大学研究院国学科であり、その後二つの組織は数年間に亘り存在した研究室と学科であった。

それは中国近現代において最も早い人文学術研究機構の成立であると言い得るものであり、国学門の体制と三室五会を包括した組織の結成を見ることになった。三室とは登録室、研究室と編集室、五会は民謡研究会、明清史料整理会、考古学会、風俗調査会、方言研究会であり、この考古学会こそが現在の北京大学考古文博学院の前身なのである。

考古学会は一九二三年五月二十四日に設立され、最初の名称は古跡古物調査会と称され、金石学で著名な馬衡教授が会長に就任し、まさに中国近代考古学の先駆となるものであった。

北京大学ではこのように考古学を核とした学問分野が発展を遂げていく中で、一九八八年、厳文明主任が博物館学専攻の名称で学生の募集を始めたのである。そして十年後の一九九八年に、北京大学と国家文物局が協力して中国文物博物館学院と北

京大学考古学古文博学院が成立した。その時の院長は李伯謙教授であった。

二〇〇〇年、考古学学科と国家文物局の協力のもと北京大学考古文博学院となり、二〇〇二年には正式に成立して高崇文教授が院長を務めることとなった。

北京大学考古文博学院は遺産学学科に博物館学教研室、古代建築教研室と文物保護教研室を有している。博物館学専攻は一九八八年に設立され、一九九八年には博物館学修士課程が考古学の専門の中に設立された。文物保護専攻も同年一九九八年から学部学生を募集している。また、北京大学にはアメリカ人の研究者と協力して一九九三年五月に建設された、アジアにおける大学博物館で最大規模を誇る考古・芸術博物館がある。

北京大学考古文博学院は考古学・博物館学系と文物保護・科学考古学系の2学部があり、考古学・博物館学系の下に考古学・博物館学の2学科、また、文物保護・科学考古学系の下に古代建築学と文物保護の2学科を有している。具体的に北京大学の博物館学関連科目は、博物館概論、博物館陳列設計、博物館資料管理、博物館経営管理、物質文化史、文化人類学、文物学概論、文物管理と法律、中国歴史地理、古代工芸美術となっている。

北京大学考古芸術博物館外景（上）・展示室（下）
（北京大学考古文博学院HPより転載）

北京大学考古文博学院の教師陣107名のうち、教授は21名、准教授は11名、助教3名で、博士を有しているのは31名、修士は3名、学士は1名である。そのうち28名は1年以上海外での仕事経験者であるが、博物館研究学科の教員は3名で、我が国の博物館学と同様の少人数制であるのが現状である。

毎年、学部、修士、博士課程の留学生を約200人募集しており、大学は国内の著名な研究機関と共同研究を行ない、国家遺産委

員会が委託した専門的な職業訓練を受託して大学入学者の増加を目指している。これまでの卒業生2，000人以上を訓練し、地元の遺跡、考古学、博物館の分野で重要な役割を果たし、全国の遺産機関の第一線で活躍している。考古学、博物館学、文化遺産、古代の建物の4部門の専門分野を設置し、一九九八年から、国家文物局と文化遺跡と古代建物の保護を目的とした指導を行っている。

中国において考古学は、国家重点学科という重要な学問領域に位置しており、大学院の学問領域は、考古学博物館学（動物考古学を含む）、旧石器時代の考古学（古人類学を含む）、考古学新石器時代・周・漢・唐宋元の考古学、仏教考古学、文化交流の研究、陶磁器考古学、フィールド考古学、博物館学、博物館コレクション、古代中国の建築、技術考古学、保存科学と多岐に亘る考古学系学問領域となっている。

前述の如く、博物館学専門の領域は一九八八年に設立され、一九九八年に博物館学の修士号が設立された。

しかし、中国の博物館学は考古学の一部に位置付けされており、その内容は考古学に特化した教育内容になっているのが特徴である。したがって、中国の博物館学はまだ発展途上にあり、確立されていないと言えるのである。中国の考古学教育は北京大学がその理念と方法をファーストクラスと掲げているように、14校のトレーニング拠点大学を置き、仏教考古学、石窟の調査、陶磁器考古学の実験、文化遺産教育実習、保存科学、建築学など幅広く考古学を学ぶ場が確立されている。言うまでもなく優秀な教師による合理的教授法が実践されており、考古学を支える学問領域として博物館学が関与しているのが現状である。

また、北京大学には前述した通りアジア最大の大学博物館を有しており、旧石器時代からの収蔵資料は学生のトレーニングの場として活用され、常設展示は定期的に更新・改善がなされている。さらに大学には高精度技術を有する考古学研究室があり、科学技術の推進を図っている。特に第四世紀考古学研究室測定精度技術は国家プロジェクトに大きく貢献したのと同時に、考古学フィールド機器の技術の近代化に努め、世界先進レベルの構築を図っている。このような考古学の取り組みは研究機関の質的向上のみならず、学生の学術的資質の向上に繋がるため、多くの研究機関が関与して教育を提供している。

二〇〇〇年に、教育・人文・社会科学研究の拠点である「北京の中国考古学研究センター」が設立され、二〇〇三年十二月には、ロンドンの大学で考古学及び博物館学の協力のもと、「国

際学と考古学のための中国文化遺産保護センター」が設置され、国際協力の重要な役割を果たした。

また、北京大学は学術研究ジャーナルとして、考古学や博物館学の学術誌を多数発刊しており、その中には大学生による遺産協会の内部出版物も含まれている。また、大学資料室の標本は、研究と保存に供されており、植物標本・考古学標本など数多くの教育標本が所蔵されている。

北京大学の考古学と博物館学は伝統を守りつつ、最新の科学技術を用いた、世界を視野にいれた教育と研究を推進している。このように教育水準を高めるために重要なことは学術交流であるとし、教員と学生の視野を広げるための海外フィールド実習を積極的に行い、レベルの向上を図っている。さらに海外からの研究者を招聘し、共同研究、講演会、学術会議を行い国際化の拡張を実践している。以上、中国における博物館学を牽引する北京大学の現状を記したが、中国の博物館学は考古学を中心とするものであり、博物館学として確立されたものではない。雲南省の博物館で館長と対談した際に「中国の博物館学は学問ではない」という発言を受けたことがあるが、正鵠を射た指摘であると思われる。

七、今後の課題

第1回上海大学博物館学研修後、上海大学において研修の報告会が行われ、本研修が上海大学でも高い評価を得ることができ、次年度の研修の継続が決定したことの報告を受けた。それに伴い、参加する学生への奨学金も大幅に増額することになり、第1回目の上海大学博物館学研修の受け入れは成功裡に終わったと言える。次年度は研修生たちの意見を反映させ、より充実した研修内容を計画し、一層高度な交流事業を実践することが求められたのである。アンケート及び教員の意見をもとに、国際交流・留学支援室の職員と綿密にスケジュールを立て直し、第2回目の研修生受け入れも無事終了した。

この博物館学研修の影響力は大きなものとなり、本学社会福祉学科と上海大学社会学院との協定締結にも繋げることができ、本年度は社会福祉学科も長崎国際大学において上海大学生を受け入れて研修を行った。このように他学科の協定も実現し、博物館学研修の成果は大きなものとなったのである。

以上のように、本学の研修は軌道に乗りつつあるが、中国では博物館に勤務する上で法律上の学芸員資格は必要としないこ

米国	Education USA（173か国400都市以上）
英国	British Council（110か国197都市）
ドイツ	ドイツ学術交流会（DAAD）（14か国14都市）
	ドイツ学術交流会（DAAD）情報センター（47か国50都市）
フランス	Campus France（97か国155都市）
オーストラリア	IDP（27か国60か所）
中国	孔子学院（104か国・地域826拠点）
韓国	在外韓国大使館韓国教育院（14か国38か所）
日本	日本学生支援帰国日本国際交流情報センター（4か国4都市）

表1　各国における留学促進関連機関（海外拠点）(2)

ともあり、博物館学の発展はあまり盛況とは言い難いのが現状である。しかし、上海大学をはじめとして博物館学を講ずる大学が増加の傾向にあるのも事実である。陝西省西安市でも文物局が博物館学講座の開講を推進して、博物館学コースを新設した大学もある。このようなことからも、今後中国に於いても、博物館学と学芸員制度が確立されることも充分予想できるのである。したがって、留学生の指導強化は、将来的に母国での博物館学の発展に寄与する人材形成に直結すると考えている。

前述したような戦略的な留学生の受け入れを実現するには、出口までの具体的な方策が求められ、細やかな対策を立てる必要がある。「留学生30万人計画」の実現には海外拠点の強化による戦略的な留学生の選抜や留学生のための宿舎の整備、留学後のキャリアパスの明確化が必要とされている。各国における留学促進関連機関は下図の通りであり、戦略的に留学生を受け入れるために在外公館や政府機関の海外事務所、各大学が設置する海外拠点と連携して情報収集を強化している。

そして、日本に留学した学生の多くが日本での就職を希望しており、海外留学生の雇用も増加傾向にある。それらの留学生は将来にわたり日本での就労を希望する者もあれば、母国でその経験を活かしたいと考えている者もおり、就労に関しては多様な目的意識が存在している。本学ではこのような政府が示した戦略条件は整っているため、留学生の育成も難しいものではない。具体的には留学生対応の宿舎の完備、日本語教育、日本での就労を視野に入れた様々な企業でのインターンシップ制度、ゼミ制度などをはじめとして、国際交流・留学支援室が中心となり留学生を支援している。留学生の大学院進学者も多く、博士取得後に母国中国の大学の教員に着任するなど、その成果は着実に高くなっている。今後は博物館学を専門とする留学生

の育成を図ることも必要であろう。

九州域の博物館学は発展途上にあるため、本学が九州域における博物館学の核となり、研究者の育成を図る必要性がある。それには、学部の学芸員課程の充実と、更に大学院における博物館学教育の強化も必要であろう。博物館への就職は、大学院を修了した者を条件とする応募が多く、学部卒業で正規の学芸員採用は非常に少ないのが現状である。また、本学の専門分野が観光学であることも学芸員への道を狭くしている要因と言える。前述した如く、我が国の博物館の8割が歴史系であることから、学芸員採用の条件は、専門が歴史・民俗・考古学などが一般的であり、観光学を専門とする学芸員の応募は無いに等しい。したがって、学部からモノ（歴史資料）を研究テーマとし、大学院に進学して博物館学を専門とする研究をすることが必要と考える。博物館学と観光学の両輪による研究を図り、学芸員の道、研究者への道が開かれることを期待したい。

註

（1）文部科学省　二〇一三年十二月十八日「世界の成長を取り込むための外国人留学生の受入れ戦略（報告書）」戦略的な留学生交流の推進に関する検討会

（2）註1と同じ

参考文献

落合知子　二〇一七「博物館学のグローバル化を目指して―上海大学博物館学研修の実践から―」『長崎国際大学論叢第17巻』